資 料

合 成 繊 維 の 回 顧 と 展 望*

— 上半期の回顧と下半期の見通し —

吉 村 文 雄**

1. ま え が き

合成繊維は45年に供給過剰状況を呈したため、46年上期には増産テンポが大幅におさえられた（合繊の前期比増産率は45年上期11.5%、45年下期15.4%に対し46年上期は4.5%であった）。このうち輸出の激増を背景として生産の大幅に増加したポリエステルフィラメントを除くと、46年上期の前期比増産率は1.1%と前期比横ばいの生産にとどまった。

これに対し輸出は45年米の供給過剰を背景とした輸出ドライブとアメリカにおけるポリエステルフィラメント不足を背景に大幅に増加した。

そのため市況は好転すると予想されたのであるが、若干底入れ感が出た程度で市況の好転まで進まなかった。これは国内加工業者の在庫調整が完了せず、仮需が盛上らなかったし、輸出の先行きにも対米自主規制など不安材料があったからである。

もっとも合繊各社はこのような状況をふまえて増設に慎重な態度をとったため、増設承認は46年3月のナイロン7t/日、ポリエステル25t/日、アクリル50t/日、7月のアクリル40t/日にとどまり、増産テンポは低水準で推移すると予想された。このような生産調整と輸出の増大を主因とし、一般経済好転予想によって46年下期以後合繊市況の好転が期待されていた。

しかし、8月15日に発表されたアメリカのニクソン政策により日本における合繊市況の回復は大きく遅れるものと思われる。何故なら米国による輸入課徴金の実施、日本の円切上げによって合繊市況回復のけんいん車とみなされていた合繊輸出に不安が生じ、またこれら

の措置により日本経済全体も不況の程度が深まると予想されるので合繊仮需の盛上がりは期待しにくいからである。

2. 合成繊維の生産動向

2.1 ナイロン フィラメントの生産

ナイロンフィラメントは45年後半から供給過剰状況を呈し、価格、収益とも低下したため、46年5月の設備能力は前年末比17/t日増の831.1t/日にとどまった（第1表、次ページ参照）。この増設は一部後発メーカーの完成分だが、先発メーカーを中心に減産が実施されたため、46年上期（1～6月）のナイロンフィラメントの生産は前期比微減にとどまった（第2表、65ページ参照）。

ナイロンフィラメントの場合、前期比増産率が45年21%増、46年上期0.4%減とポリエステルフィラメントに比べ低かったにもかかわらず、供給過剰状況を呈した点に成長力の低さが読みとれる。

46年にはいつてからの化繊協調懇談会による増設承認はわずかに3月に7t/日が認められただけであり、その後は8月まで見送られている（第3表、65ページ参照）。また承認済み設備能力867.6t/日のうち未完成分は46年5月時点で36.5t/日にすぎない。しかし46年前半に大きな伸びを示した輸出の先行きに7月からの対米輸出自主規制の実施、8月の米国による10%の輸入課徴金実施、8月末の実質的円切上げ策など大きな不安材料があるので今後大幅な増設承認が進む可能性は少ない。

したがって46年後半から47年前半にかけてナイロンフィラメントの生産は減産を強いられよう。

* Prospect and Retrospect of Synthetic Fiber Industry.

** F. Yoshimura, 東洋紡績 経済研究所

2.2 ポリエステル フィラメントの生産

ポリエステル フィラメントの場合 44 年後半の需給ひっばくと増設枠拡大を背景に先発メーカー 2 社、後発、後々発メーカー 6 社の大增設が進んだため 45 年には前年比52% 増の大增産となった。そのため、内需、輸出の高成長にもかかわらず市況は軟化した。しかし、45 年末から 46 年 前半にかけてのアメリカ向けの ポリエステル フィラメント輸出の激増という好材料もあって、各社は承認済み設備の完成を進め、46 年 5 月には前年末に比べ 78.2 t /日の増設となった(第 1 表参照)。そのため 46 年上期の生産量は前年同期比 63.8% 増、前期比 27.4% 増の大增産となった (第 2 表参照)。

価格低下幅が大幅であったにもかかわらず、46 年上期も大增産が続いた点にポリエステル フィラメントの輸出激増とメーカーの経済規模への達成意欲の強さが読みとれる。

もっとも 46 年にはいつてからの化繊協調懇談会による増設承認はわずかに 3 月に 10 t /日 が認可されただけで、その後は 8 月まで見送られている(第 3 表参照)。承認済み設備能力 541.7 t /日 のうち未完成分は 46 年 5 月時点で 29.2 t /日にすぎないが、46 年前半に激増した輸出の先行きに、7 月からの対米輸出自主規制の実施、8 月の米国による 10% 輸入課徴金の実施、8 月末の実質的円切上げ策など大きな不安材料があるので今後大幅な増設承認が進む可能性は少ない。

したがって 46 年下期から 47 年上期にかけての増産率は鈍化しよう。

2.3 ポリエステル ステープルの生産

ポリエステル ステープルは 44 年後半の需給ひっばくと増設枠拡大を背景に既存メーカーが大增設を進めたため、45 年には前年比30%の増産となった。しかし内需、輸出の伸びが生産の伸びをかなり下回ったため供給過剰、価格低下状況を呈した。そのため 46 年上期の生産量は前期比 3 %増にとどまった。46 年以後の化繊協調懇談会による増設承認はわずかに 3 月に 15 t /日 が認められただけであり、その後は 8 月まで見送られている(第 3 表、次ページ参照)。また承認済み設備能力のうち未完成分は 18.8 t /日にすぎないが、46 年上期に大きな伸びを示した輸出の先行きに 7 月からの対米自主規制の実施、8 月の米国による 10 % の輸入課徴金の実施、8 月末の実質的円切上げ策など大きな不安材料があるので、今後大幅な増設承認が進む可能性は少ない。したがって 46 年 後半から 47 年前半にかけてポリエステル ステープルの

(第 1 表) 四大合繊の設備能力推移 (t /日)

		設備能力推移			承認済み 設備能力
		44年12月	45年12月	46年 5 月	
ナイロン フィラメント	東レ	249.8	272.3	274.4	288.9
	ユニチカ	144.1	159.1	159.1	174.1
	帝人	87.4	106.9	106.9	113.9
	鐘紡	87.1	102.3	102.3	102.3
	旭化成	71.5	101.5	101.5	101.5
	東洋紡	71.9	71.9	86.9	86.9
計		711.8	814.0	831.1	867.9
ポリエステル フィラメント	東レ	86.2	121.0	126.6	126.6
	帝人	79.2	114.1	121.7	126.3
	東洋紡	33.0	51.8	66.8	66.8
	東洋紡ベ ットコード		12.0	12.0	17.0
	クラレ	10.0	15.0	45.0	45.0
	日本エステル	23.0	39.7	39.7	39.7
	旭化成	6.3	30.3	40.3	40.3
	鐘紡	10.0	30.4	30.4	40.0
	三菱レ	6.1	20.0	30.0	40.0
計		253.7	434.3	512.5	541.7
ポリエステル ステープル	東レ	105.4	150.1	150.1	150.1
	帝人	113.3	154.6	155.0	155.0
	クラレ	65.0	90.0	95.0	95.0
	日本エステル	54.6	85.0	85.0	100.0
	東洋紡	49.6	54.6	68.6	72.6
	計	387.9	534.3	553.7	572.6
アクリル ステープル	旭化成	130.0	173.0	173.0	188.0
	三菱レ	130.0	173.0	173.0	188.0
	日本エクス スライン	143.0	158.0	158.0	188.0
	東邦ベス ロン	80.0	118.0	118.0	133.0
	東レ	73.0	117.0	117.0	132.0
	鐘化	23.0	43.0	43.0	63.0
	鐘紡				15.0
計		579.0	782.0	782.0	907.0

生産は 46 年上期比に押さえられよう。

2.4 アクリル ステープルの生産

45 年のアクリル ステープルは拡大された増設基準のもとで大增設が進んだため前年比 38.8 % 増の大增産となった (第 2 表、次ページ参照)。アクリル ステープル需給はポリエステル、ナイロン市況軟化のもとで国内向けの高成長のため 45 年秋まで堅調であったが、秋以後メリヤス製品に過剰気配があって 46 年上期の生産量は前期比 2.5 % 増にとどまっている (第 2 表、次ページ参照)。しかし 46 年にはいつてからの化繊協調懇談会によ

(第2表) 合成繊維の生産推移

	生産 (トン)			前年同期比増加率 (%)			前期比伸び率 (%)		
	45年 上 (1~6)	45年 下 (7~12)	46年 上	45年 上	45年 下	46年 上	45年 上	45年 下	46年 上
ナイロン フィラメント	138 059	149 043	148 445	23.4	18.9	7.5	10.2	8.5	- 0.4
“ ステープル	7 932	8 117	7 886	9.3	5.6	9.9	3.2	2.3	- 0.3
計	145 991	157 160	156 331	22.5	18.2	7.1	9.8	7.7	- 0.1
ポリエステル フィラメント	55 692	71 574	91 244	46.3	56.6	63.8	21.8	28.5	27.4
“ ステープル	83 128	98 487	101 402	27.6	32.2	22.0	11.6	18.5	3.0
計	138 820	170 061	192 646	34.5	41.5	38.8	15.5	22.5	13.3
アクリル フィラメント	678	787	839	23.7	36.2	23.7	17.3	16.1	6.6
“ ステープル	118 168	143 187	146 784	36.5	40.6	24.2	16.1	21.2	2.5
計	118 846	143 974	147 623	36.5	40.6	24.2	16.1	21.1	2.5
その他 フィラメント	20 559	20 325	20 009	11.7	12.1	- 0.4	13.4	- 0.2	- 0.2
“ ステープル	53 940	59 284	58 910	5.9	11.4	9.2	1.4	9.9	- 0.1
計	74 499	79 069	78 919	7.4	10.8	5.9	4.4	6.1	- 0.1
合計 フィラメント	214 988	241 729	260 537	27.2	26.7	21.2	12.7	12.4	7.8
“ ステープル	262 168	309 075	314 982	24.9	30.3	20.1	10.5	17.9	1.9
計	477 156	550 804	575 519	25.9	28.7	20.6	11.5	15.4	4.5

(第3表) 四大合繊の増設承認推移

(t/日)

	44年10月 までに承認済 みの能力	新しい増設基準下での増設承認推移					
		44年11月	45年 2月	45年 7月	45年10月	46年 3月	46年 7月
ナイロン フィラメント	719.8	69.4	50.5	13	8	7	0
ポリエステル フィラメント	280.4	87.9	95.1	58.3	10	10	0
ポリエステル ステープル	386.4	70	80.5	20	0	15	0
アクリル ステープル	592.0	86	55	81	0	50	40

る増設承認は3月に50 t/日、7月に40 t/日とかなりの量が認められている(第3表参照)。これはナイロン、ポリエステルに比べ46年のアクリル市況が好調であったことを示している。したがって46年後半から47年前半にかけ増産が進むと予想されていた。しかし円切上げなどの悪材料が出てきたので、生産水準が押さえられる可能性がある。

3. 合成繊維の輸出動向

3.1 ナイロン フィラメント輸出

45年のナイロン フィラメント+織物輸出(二次製品を除く)は前年比横ばいにとどまった。これは織物輸出の増加がフィラメント輸出の減少に相殺されたことによる。

45年のフィラメント輸出は前年比15%も減少したが、

これは43年の38%増、44年の43%増に比べ大きな変化である。この減少は、東南アジアの不振による。

織物輸出は重量ベースで28%増加した。

これに対し46年上期の輸出実績は45年の価格低下と輸出ドライブもあって前年同期比37%増を示した。フィラメントは台湾、香港、フィリピン向け輸出が急増し、織物は香港、シンガポール向けが急増した。46年後半は円切上げも含めて不安材料が多いので輸出の伸び率鈍化は避けられまい。

3.2 ポリエステル フィラメント輸出

45年のポリエステル フィラメント+織物輸出(二次製品を除く)は大増産下の輸出圧力と海外の強い需要に支えられて63.5%の増加を示した。フィラメント輸出はダブル ニット ブームに乗ったアメリカ向けが急成長

し、韓国、台湾、香港向けもアメリカ向け二次製品輸出の増加に支えられて著増した。フィラメント織物輸出の増加の主力はアメリカ向けおよびその加工基地としての香港向けの増加による。

46 年上期の輸出実績はポリエステル フィラメントが 266.8% 増、織物が 83.9% 増と激増した。フィラメント輸出激増の中心は何といってもダブル ニット ブームを背景としたアメリカ向けであり、ついで韓国、台湾、香港、英国、西ドイツ向けであった。織物輸出もアメリカ向けが一番伸びが高く、ついでシンガポールなどであった。

46 年下期は対米自主規制の実施、アメリカの輸入課徴金の実施、円切上げなど悲観材料が多いので先行き成約は鈍化の可能性がある。しかし 46 年上期に大量に成約されたフィラメント (46 年 1～6 月の成約量は約 70 000 トン) のかなりが年後半に船積みされると思われるので、船積みベースではかなりの伸びを示そう。

3.3 ポリエステル ステープルの輸出

45 年のポリエステル ステープル、紡績糸、織物の輸出は前年比 14% 増と、30% の生産増に比べ低い伸びにとどまった。とくにステープル輸出の伸び悩みは欧米の増産と景気後退を背景とした欧米メーカーの安値輸出による。

これに対し 46 年上期は 45 年の輸出ドライブ、価格低下によってステープル輸出が前年同期比 108.7% 増の伸びを示し、紡績糸、織物を加えても前年同期比 42.1% の増加を示した。ステープルでとくに増加が著しいのは、韓国、中国、台湾、香港、インドであった。

46 年下期は円切上げの動きもあり、不安材料が多いので伸びの鈍化が予想される。

3.4 アクリル ステープルの輸出

45 年のアクリル (ステープル、糸、織物) 輸出は前年比 6% 増にとどまり、44 年の前年比 45% 増に比べ伸びが大きく鈍化した。これはステープルが国内で不足したもとで、欧米の供給過剰により欧米向け輸出が激減したこと、国内の紡績糸が極度に不足したため、輸出玉が確保できなかったことによる。

これに対し 46 年上期の輸出は国内に供給過剰気配があったことも影響して台湾、韓国、西ドイツ、アメリカ向けを中心に前年同期比 31% の増加を示した。しかし下期以後対米自主規制、輸入課徴金、円切上げの影響で輸出の伸びが鈍化と思われる。

4. 合成繊維の価格

4.1 ナイロン フィラメント価格

45 年のナイロン フィラメントは 21% の増産下で内需、輸出とも伸び悩んだため市況は軟化した。もっとも用途により市況はかなり違いメリヤス用途、産業用途に比べ衣料用織物がとくに悪かった。衣料用織物分野は 44 年来的生産急増とポリエステル織物との競合の影響で、供給過剰となり、価格も低下した。ナイロン フィラメントのメーカー在庫は 44 年の 7 000 t 台から 45 年末の 10 000 t 台に増加し、70 デニール市中相場も 44 年の 500 円/kg 台から 45 年末の 400 円/kg 台に低下した。46 年上期には供給過剰状況を反映して、先発メーカーを中心に減産が実施され、輸出ドライブにより輸出が大幅に増加したので、需給関係は徐々に好転しつつあった。しかし 7 月からの対米自主規制の実施、8 月の米国輸入課徴金、実質的円切上げにより輸出の先行きに不安が生じ、国内一般経済の景気回復も遅れると思われ、内需の高成長も期待できないので、たとえ生産が押さえられても市況の回復は期待できないであろう。

4.2 ポリエステル フィラメント価格

昭和 45 年のポリエステル フィラメントは既存、新規合計 8 社の増設の影響が全面的に出て 51.9% 増の増産となった。このような大增産のため、輸出が前年比 63.5% 増と急増したにもかかわらず、内需が大增産を吸収できるほど増加しなかったため需給は軟化し、企業間競争の激化も作用して価格は 400 円/kg ほど低下した。とくに織物分野での過剰生産の程度が大きく、織物の増産率は 45 年前半の 50% 弱増から後半の 20% 弱増まで鈍化した。これに対し、フィラメントの増産率は 45 年前半の 46% 増から後半の 57% 弱増まで上昇したため、フィラメント需給は後半にかけて大きく軟化したのである。

46 年上期はフィラメントの前年同期比増産率が 64% であったのに対し、織物のそれは 14% 増であったが、アメリカのニット ブームを背景にフィラメント輸出が激増した (46 年上期輸出実績は前年同期比 266.8% 増) ため、フィラメント段階での需給はさほど軟化せず、価格も低水準横ばいりに推移した。もっとも織物段階ではまだ供給過剰感が強かった。

46 年下期は、輸出激増と増産テンポの抑制によって需給が好転すると予想されていたのであるが、対米自主規制、輸入課徴金の実施、円切上げなど輸出の先行きに不安が続出しているので楽観は許されない。ポリエステル

フィラメントの大量の輸出成約はアメリカにおける供給不足を背景に進んでいたもので、輸入課徴金の実施、円切上げの影響がナイロン、ポリエステル ステープル、アクリル ステープルほどシビアに現われるとは思われないが、悪材料となることは間違いない。需給の好転は延期される可能性が強い。

4.3 ポリエステル ステープルの価格

昭和 45 年は協調懇の増設基準が改定されたもとで大增設が進んだため、生産は前年比 30% 増と大幅にふえた。これに対し輸出は海外市況の悪さを反映し 14% 増の伸びにとどまり、内需の伸びも 10% 台の伸びにとどまったため、市況は大幅に軟化した（メーカーのステープル在庫率は 44 年末の 30% 強から 45 年末の 50% 強まで上昇した）。また ポリエステル 短繊維織物の生産量も 44 年の 33.6% 増から 45 年の 13.7% 増に鈍化した。このような需給失調のため ポリエステル ステープル 価格は 100 円/kg 低下し、採算は悪化した。

このような需給軟化のため、46 年上期の生産は前期比 3% 増に押さえられた。しかも強力な輸出ドライブがかけられてステープル輸出が激増したため市況は回復に転ずるかと思われた。もっとも輸出価格は大幅に低下し採算は苦しくなっていた。

46 年下期の需給は、生産調整下の輸出激増によって好転すると予想されていた。しかし輸出の先行きは対米自

主規制の実施、米国の輸入課徴金の実施、実質的円切上げなどにより楽観できず、しかも ポリエステル ステープルの場合価格水準が低いので円切上げの影響はより大きいと思われる。とすれば、たとえ生産調整を実施しても ポリエステル ステープルの市況の回復は遅れよう。

4.4 アクリル ステープル価格

昭和 45 年は協調懇の増設基準が改定されたもとで大增設が進んだため、生産は前年比 39% 増と大幅にふえた。しかしメリヤス用途を中心とする仮需が旺盛であったため、輸出の伸びが前年比 5.9% 増と低かったにもかかわらず市況は堅調であった。輸出の伸び率低下は欧米のアクリル ステープル市況の軟化も影響しているが、国内での仮需が旺盛であったため低価格の輸出の伸びを押さえたことによる。もっとも旺盛な仮需によって実現したメリヤス製品のの一部が 45 年秋以後実需にぶつかって市況軟化気配にあるので、輸出圧力が強まりつつある。

昭和 46 年上期の生産量は一部製品の市況軟化を反映して、前期比 2.5% 増に押さえられた。他方、輸出の増加率が高まっているので需給ひっばくの程度は 4 大合繊の中で一番大きかった。そのため 46 年 3 月、7 月と合計 90 t/日 の増設が承認されたのである。

しかし 46 年後半以後の対米自主規制の実施、輸入課徴金の実施、実質的円切上げなどによって輸出に新たな不安材料が加わったので、市況の好転は期待しにくい。

日本 繊維 機械 学会 繊維文献分類法の改訂について

本会の繊維文献分類法は、このたび若干改訂されることになり、昭和46年1月から下記分類法に従ってこれを実施することになりました。

〔A〕 繊維ができるまで

0. 全 般
1. 天然繊維
2. 人造繊維
3. 繊維の性質

〔B〕 糸ができるまで

0. 全 般
1. 紡績準備
2. カードから粗紡まで
3. 精 紡（巨紡を含む）
4. 後 工 程（燃止め、チーズ巻返し、かせ巻、かせ巻返し、終かけを含む）
5. 加工糸の製造および特殊製法
6. 糸の性質

〔C〕 布ができるまで

0. 全 般（織物組織、分解、設計を含む）
1. 編織準備（移付、整経、ドロワイシ、リリーディング、よこ巻きを含む）

2. 製 織（製織のための織方図を含む）

3. 編 組（レース、ししゅう、織物物題を含む）
4. 後 工 程
5. 不織布の製造および特殊製法
6. 布の性質

〔D〕 染色仕上

0. 全 般
1. 物理的加工（金属蒸着を含む）
2. 化学的加工（WW、コーティングを含む）
3. 染 色
4. 染色仕上品の性質

〔I〕 最終製品

0. 全 般
1. 衣料とインテリア（縫製、タフテイングを含む）
2. 産業資材
3. 最終製品の性質
4. 洗たくとドライクリーニング

5. そ の 他

〔E〕 試 験 法

0. 全 般
1. 織 維
2. 糸
3. 布
4. 染色仕上品
5. 最終製品
6. そ の 他

〔F〕 管理および経営

1. 管理工学（IE, OR, QC, SE, などを含む）
2. 工場設備および機器
3. 経 営（マーケティング、フアツションなどを含む）

〔G〕 基礎科学（数学、物理学、化学、医学、生物学などを含む）

〔H〕 そ の 他

（各項の細目は省略します）